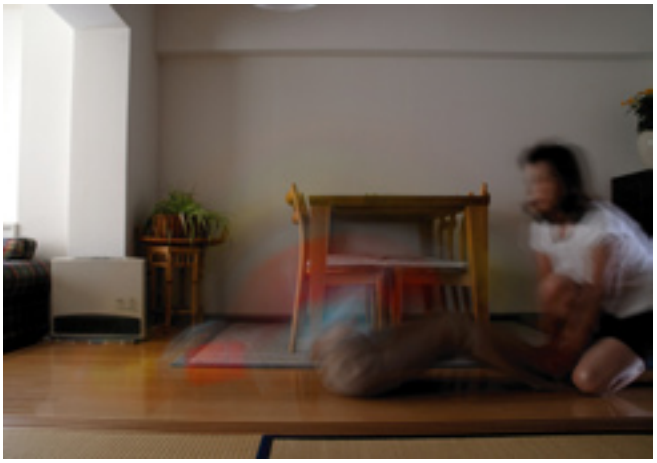
Press Release

2012.1.13

TALION GALLERY
110-0001　東京都台東区谷中 3-23-9
Tel 03-5834-2785 Fax 03-5834-2786
info@taliongallery.com　www.taliongallery.com
広報担当：白尾

小泉圭理　友政麻理子
「国民の祝日｜National Holidays」
2012 年 1 月 14 日 (土) - 2012 年 2 月 11 日 (土)
オープニングレセプション：2012 年 1 月 14 日 (土)18:00 - 20:00

TALION GALLERY にて、2012 年 1 月 14 日 (土) より 2012 年 2 月 11 日 (土) まで、
小泉圭理と友政麻理子による二人展「国民の祝日」を開催いたします。
是非ともご高覧賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



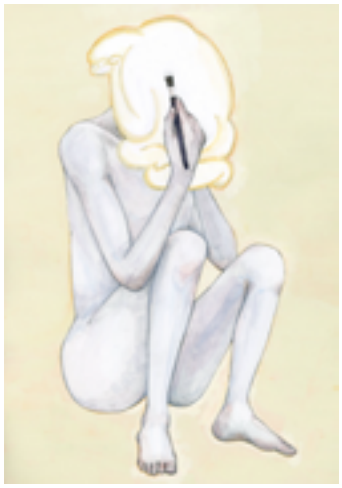
Mariko Tomomasa
Training -And then, we will climb the rainbow-
2010
Photograph
254 x 305 mm

Keisuke Koizumi
Want to Sustain Paper
2011
Water color and ballpoint pen on paper and medium
190 x 190 mm

ペンと紙が衝突してドローイングが生まれ、男と女が衝突して新しい生命が生まれる。そこに大きな違いはない、と小泉圭理は述べている。キャンバス自体も、木の棒が布でくるまれ、または布が木の棒で支えられ出来ているように、相互にまぐわり交接している。そこに絵筆が突き立てられ、新しいかたちが生まれる。つくることと交わることの同型性。小泉にとっては、紙に絵が描かれること、あるいは絵画が壁にかけられること、2 次元平面と 3 次元空間の諸関係の問題も、ユニバーサルな空間と事物の問題というより、一回かぎりの出会いと交わりなのである。

小泉の作品にしばしば登場する、先の尖ったものや、丸みを帯びたイメージなどは、それぞれに男性性や女性性の隠喩、より直接的には性器の変形として読み取ることができる。そこに精神分析学的な性愛の再演や代行、あるいは古事記の国生みの記述などに見られるように、神話的想像力との類縁性をみることは難しくない。しかし、小泉の描くものは、マッチョなシンボリズムやシンクレティックなイメージの披瀝とは、明らかにかけ離れている。慎ましい色とかたち、そしてイメージの平面性を突き抜ける奔放さ。そこにはイコノロジカルな読解の及ばない、今日的な性愛関係の屈折と象徴秩序のねじれが表れている。この 21 世紀初頭の 10 年間で、日本社会における若年層の性愛関係、性をめぐるイメージとその欲望のされ方は、劇的に変化した。この大きな変化のひずみに、小泉が筆を突き立てるべき隙間がある。

本展「国民の祝日」で小泉は、大型・中型のペインティング 2 点、ギャラリーの構造的特徴を利用した半立体作品２点、そしてドローイング作品 3 点と、すべて新作によって展示を構成する。抑圧が抑圧たり得ず、他者の欲望を欲望できない今日の状況にあって、新たなセクシャリティの探索ともいえる小泉の表出に、ぜひご期待ください。



Keisuke Koizumi
Comfort
2011
Water color on paper
297 x 210 mm

Keisuke Koizumi
asunaro
2007
Acrylic on canvas
1200 x 1000 mm

Keisuke Koizumi
my jazz
2006-2008
Ballpoint pen on paper
140 x 100 mm each

小泉圭理　Keisuke Koizumi
1985 年東京生まれ。武蔵野美術大学油絵学科卒業。
主な個展に、“MY JAZZ” 武蔵野美術大学（東京）、グループ展に「シークレット・シークエンス」AMP café（2010/ 東京）、「Truth　—貧しき時代のアート—」hiromiyoshii（2009/ 東京）など。

-

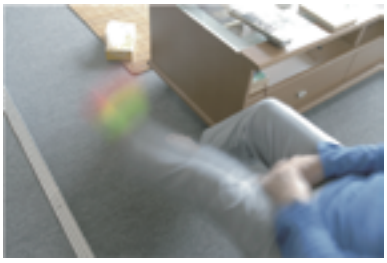
友政麻理子は、映像や写真を主に用いたインスタレーションによって、フィクションとドキュメンタリーの合間を縫う、ささやかな物語の解体と再生を提示する。日常的な「記憶」や「まなざし」のサンプリングと編集を繰り返し、ときに鑑賞者を参加者として巻き込むドラマトゥルギーの対象となるのは、家族のような親密な相手との会話や、見知らぬ他者とのコミュニケーションを図ることで生まれた、自己投影的なストーリーの断片である。映像インスタレーションやパフォーマンスとしても展示される作品『お父さんと食事』では、「いただきます」から「ごちそうさま」までの間だけ親子になるという約束をして、友政は自分の父親くらいの年齢の、見知らぬ男性と食事をする。シナリオもなく、相手がどんな人物なのかも知らないまま、「親子」というあやふやなイメージによって会話はつながる。そのぎこちなさや居心地の悪さとともに、偽の親子と本物の親子、家族とそうでないものとの境界の不確かさを浮き彫りにしている。

また、『お父さんと食事』が行われた部屋のテレビには、映像作品『お父さんごっこ』が流れている。複数の人が軍手人形をつけた両手を使い、個々人の体験に基づく父と子の会話を再演する映像は、まるでバラバラな会話が一つの家庭で起きたことのように感じられ、全ての参加者が語る父親がある固有の一人であるかのように錯覚する。友政自身は、自らの制作手法について次のように述べている。「私の制作で、人と人の間に様々な『枠組み』や、『型』や『フレーム』を投げ入れるという方法をとってきた。その枠組みや型は、『家族』や、『ごっこ』や『物語』といった、ある意味相手の一部分を拘束するようなルールだったり『まなざしをむける』というぐらいのささいな方法であったりもした。関係に枠組みや、型が投げ入れるたりことで、枠組みからはみ出すような、何ものかがあたりを漂いだすのを感じることができる。そのようななにものかを導きだすために、こういった方法をとってきた。現れるものはいつも何気なく、普段なら気にもとめないような事柄だ。」

本展「国民の祝日」では、盆踊りを題材とした新作映像作品と、歩き方の型を基にして不在の人物のものまねをし、その姿を通してコミュニケーションをとる新作映像インスタレーション、そして友政の筋肉トレーニングや祖母のリハビリ運動の残像によって「虹」のイメージを形づくる写真作品 3 点を展示する。また、映像作品『お父さんと食事』がイタリアでの「Videozoom: Giappone – Reframing the Everyday」展で展示された際の再編集版を展示する。親密でありながら遠く離れていて、見知らぬ他者でありながら自分自身でもあるような、そうした不在の存在と交信を図ろうとする友政の一連の作品世界を、是非ご覧ください。

Mariko Tomomasa
OTOUSAN GOKKO
2008, 2000
Video
60 min

Mariko Tomomasa
Rainbow / Continental
Drift Theory
2005
C type print, video
127 x 178mm, 60min



Mariko Tomomasa
Training -And then, we will climb
the rainbow-
2011
Photograph
254 x 305mm

友政麻理子　Mariko Tomomasa 1981 年埼玉県生まれ。東京芸術大学大学院美術絵画専攻修了、東京芸術大学大学院美術博士過程後期在籍。主な個展としては、「Mariko Tomomasa exhibition」藍画廊 (2011/ 東京)、「カミフブキの家」GALLERY OPEN DOOR (2007/ 東京)。主なグループ展に、「Kanazawa Art Platform 2008」金沢 21 世紀美術館 (2008/ 金沢)、「muc-tok」Akademie Der Bildenden Kunsste（2003/ ミュンヘン）など。

—

是非、本展覧会に関しまして貴誌・貴社にてご紹介賜りますようお願い申し上げます。掲載用写真の貸出、ご質問などございましたら、下記までお問い合わせください。

タリオンギャラリー　広報担当：白尾亜弓
110-0001 東京都台東区谷中 2-23-9 tel:03-5934-2785 fax:03-5834-2786
email: info@taliongallery.com website: www.taliongallery.com
営業時間：11:00-19:00　定休日：日・月・祝日